

聖書：士師記 16：1～31

説教題：サムソンの死と勝利

日時：2014年11月9日

サムソンについての最後の章となります。私たちはここに良いことを見たいと思います。最後には素晴らしい彼の働きが記されるのではないかと期待します。しかしここでも私たちの期待は裏切られます。サムソンはペリシテ人の町ガザへ出かけて行って、ひとりの遊女を見付け、彼女のところにはいった。イスラエルを救い出すために出かけたというなら分かりますが、彼は不道德の罪を犯しに出かけた。イスラエルの希望の星である士師がこんなことで良いのか、と読む私たちは再び衝撃と失望を感じるでしょう。

サムソンがガザに来た噂はすぐ町の人々に伝わります。ペリシテ人は朝になったら襲いかかろうとして町の門で一晩中待ち伏せしました。ところがサムソンは真夜中に起き上がり、町の門まで来ると、その扉と2本の門柱をかんぬきごとに引っこ抜きます。そしてそれを担いでヘブロンに面する山の頂まで運んで行ってしまった。重い荷物を背負って坂道を上るのは大変なエネルギーを要しますが、サムソンはこれを山頂まで持って行ったのです！ペリシテ人はただ茫然と見送るしかありません。

このようにサムソンは圧倒的な怪力を見せ付けたかと思うと、次はまた女です。彼はソレクの谷にいるデリラというひとりの女を好きになります。ペリシテ人は彼女を通してサムソンの力の秘密を知ろうとします。6節：「そこで、デリラはサムソンに言った。『あなたの強い力はどこにあるのですか。どうすればあなたを縛って苦しめることができるのでしょうか。どうか私に教えてください。』」サムソンはある程度は警戒しています。かつて同じようなことで痛い目にあったことがありました。サムソンは今、デリラを愛していますが、デリラもペリシテ人に漏らさないとはいりません。しかしサムソンは少し戯れようと考えたのでしょう。7節で「もし彼らが、まだ干されていない7本の新しい弓の弦で私を縛るなら、私は弱くなり、並みの人のようになろう。」と言います。デリラはこのことを行なってみますが、当然失敗します。力のもととは知られません。デリラはまた問います。10節：「デリラはサムソンに言った。『まあ、あなたは私をだまして、うそをつきました。さあ、今度は、どうしたらあなたを縛れるか、教えてください。』」サムソンはまた別の答えをします。「もし、彼らが仕事に使ったことのない新しい綱で、私をしっかり縛るなら、私は弱くなり、並みの人のようになろう。」デリラがこれを試

みるも、また失敗しました。デリラは更に問います。そして今回、サムソンはこう答えました。13節：「もしあなたが機の縦糸といっしょに私の髪の毛7ふさを織り込み、機のおさで突き刺しておけば、私は弱くなり、並みの人のようになろう。」 注目すべきはここで秘密の場所にぐっと近づいたことです。ほとんど答えの一手手前まで来ています。そしてこの次に彼は転んでしまうのです。

ここに人はいかにして誘惑に負けるのかのプロセスがあります。すなわち、少しずつ気を許して行った結果として、ついに負けてしまう。サムソンも最初は教えるつもりなどありませんでした。「ちょっと楽しむだけである、最終的な秘密はどうせ明かさないのだから」と心に誓っているつもりでした。そうして、ここまでは大丈夫だろう、ここまでは大丈夫だろう、と進んで、ついに自分の「髪の毛」にまで触れた。彼としては、「髪の毛」とは言っても、それを「剃ること」とまで言わなければ大丈夫と思ったのでしょう。しかしそうは行かなかった。ここに誘惑は早い段階で断ち切るべし！という教訓を私たちは受け取るのです。誘惑から自分を守る最良の方法は、小さな始まりを許さないことです。もし少しでもその道を進んでいることに気付いたら、すぐにでもそれを断ち切るべきであるということです。そうでないとサムソンのように、絶対自分はそこまでは行かないと思っていたところまで、いつの間にか行ってしまっている自分を発見することになるのです。

3回もだまされたデリラは意地でも聞き出そうと迫ります。「あなたはどのようにして私を愛していると言えるのでしょうか」と責め立て、毎日しきりにせがみました。最初はおふざけ程度で始まったこのゲームも、それでは済まない状況に変わって来ました。デリラの訴えは益々強くなる一方です。サムソンの心は大揺れに揺れ、死ぬほどつらい状況になった。そしてとうとう来るべき日が来てしまいます。17節：「それで、ついにサムソンは、自分の心をみな彼女に明かして言った。『私の頭には、かみそりが当てられたことがない。私は母の胎内にいるときから、神へのナジル人だからだ。もし私の髪の毛がそり落とされたら、私の力は私から去り、私は弱くなり、普通の人のようになろう。』」

デリラは女の直感で、今回は間違いなくサムソンは本当のことを語った、と分かります。そして眠っている間に彼の髪の毛をそり、「サムソン。ペリシテ人があなたを襲って来ます！」と言います。サムソンは起きあがり、いつものごとく、からだをひとゆすりしてやろうと言うものの、悲しいかな、主の力はすでに彼から去っていた。サムソンはついにペリシテ人に捕らえられてしまったのです。

サムソンは恐ろしい扱いを受けることになります。ペリシテ人に両目をえぐり取られ、取り返しのつかない体にされます。そしてガザに引っ張って行かれ、青銅の足かせをかけられ、牢の中で白を引く者とされてしまった。これはサムソンがこれまでの歩みの結果、刈り取った報いです。私たちはこれまでサムソンの記事を読み、神の器がこんなことで良いのかと思って来たでしょう。なぜ主は彼をそのままにしておかれるのか、と。しかしここに彼に対する罰が下されています。私たちはみことばを無視して歩んでも何も災いは起きないと言って、神を試してはならないのです。人は蒔いたら、その刈り取りもしなければならないのです。

こうしてサムソンは変わり果てた姿となりペリシテ人たちの宴会に引き出されます。ペリシテ人たちはダゴンに盛大ないけにえをささげ、喜び祝いました。そしてサムソンを見世物にしようとし、25節に「彼は彼らの前で戯れた。」とあります。ペリシテ人がサムソンの前で戯れたのではなく、サムソンがペリシテ人の前で戯れた。もちろんサムソンが自らダンスをして見せたわけではないでしょうが、彼は色々な格好をさせられて、ペリシテ人の余興の対象にさせられたのです。笑い者とされ、からかわれ、踊らされては馬鹿にされた。どんなにみじめで、言葉にできない屈辱的な扱いを受けたことでしょうか。

しかし私たちはこの最後の場面に驚くべき逆転を見ます。伏線は22節にありました。サムソンの頭の毛はそり落とされてから、また伸び始めていました。サムソンはこのみじめさと非常な苦しみの中で悔い改めに導かれていたのでしょうか。そんな彼にもう一度チャンスが与えられています。サムソンは苦しみのただ中から主に向かって呼びわります。28節：「サムソンは主に呼ばわって言った。『神、主よ。どうぞ、私を御心に留めてください。ああ、神よ。どうぞ、この一時でも、私を強めてください。私の二つの目のために、もう一度ペリシテ人に復讐したいのです。』」この祈りに主は答えてくださいました。サムソンが祈って柱を手で引いた時、宮全体がそこにいたすべての人々の上に崩れ落ちたのです。27節を見ると、ペリシテ人の領主たちがみないたと記されていますが、これによってペリシテ人は自分たちの国のリーダーを一気に失いました。またダゴンもろとも、その宮がこのように破壊されたことはイスラエルの神がいかにダゴンを上回る神であるかをはっきり示す出来事でした。「こうしてサムソンが死ぬときに殺した者は、彼が生きている間に殺した者よりも多かった。」

以上の記事から何を学ぶべきでしょうか。三つの点を最後に簡単におさらいしてまとめたいと思います。その第一は私たちが御心にそむいて歩むなら、必ず懲らしめられるということです。神は私たちが何をしても、いいよいいよ、構わないよ、赦すよ、と微笑んでいる方ではありません。父は子どもをダメにする愛し方はしません。正しい道へ促しているのに、その声に聞かないなら、厳しく懲らしめるのです。一体誰がこの章のサムソンのような扱いを受けたいと思うのでしょうか。彼は生き地獄を経験させられました。自分のしたことへの報いはこのように必ず来ることを覚えて、私たちは今日の自分の行動を決定しなくてはなりません。

二つ目に、前の章に続いて私たちはここでも祈りへの励ましを受けます。サムソンは20節で「主が去られた」と表現される状態に自らを置きました。そして自業自得の悲惨な報いを受けていました。そんな状態の彼だったのに、主は彼の祈りに聞いてくださった。ある人は主の御手は不忠実なしもべの上を下るが、にもかかわらず主の耳はその叫びに対して開かれていると言いました。ですからたとえ罪を犯してさばきを刈り取っているような中でも、私たちは主に祈って良いのです。ダゴンの宮からでも主への叫びは届くのです。

そして三つ目に思うことは、こんなサムソンを用いた主の恵みについてです。本来、サムソンのような姿を示したら、もう彼を導くのはやめた！面倒見きれない！と結論を下しても良いはずですが。しかしサムソンの勝手な歩みが記されれば記されるほど逆に浮かび上がってくるのは、そのような彼をなおも導き続けて下さった主の真実です。彼を捨てず、むしろ用いて、ご自身の御心を成し遂げるようにして下さった。これはやがて天で会うサムソンにとってどんなに大きな慰めでしょうか。一生を振り返るなら後悔することしかありません。本来、目をえぐり取られ、辱められたまま、生涯が終わってもおかしくありませんでした。しかしそんな自分を通して、主は勝利を導いて下さった。ペリシテ人からイスラエルを救い始めるという召命に歩ませて下さった。それは自分によることではなく、ただ主のあわれみにのみよることだった、とサムソンはやがて天国で証ししてくれるでしょうし、この箇所もそのように証ししているでしょう。

このような主を見上げるところに、私たちの大きな希望があります。私たちはなぜ主はこんなサムソンを用いたのかなどと言ってはならない。私たちもたくさんの罪を御前に犯している者です。そしてその報いとして、様々な災いもこの人生で受けているでしょう。しかしそんなどうしようもない、歩みの定まらない私たちと格闘して、主は私た

ちに勝って下さるのです。そして誤り多き私たち一人一人の歩みを御手におさめて、ご自身の良い御心を実現して下さい。ただ恵みにより、私たちの歩みを意味ある人生、空しく終わらない人生、主の栄光のために用いられる人生として下さる。

私たちはこの恵みの主を仰ぎ、主の前にへりくだって、賛美と感謝の礼拝をささげたいのです。この主を正しく仰ぐなら、私たちは自分の歩みに無頓着で良いとは考えないでしょう。この主に少しでも感謝を表せるように、この主に喜ばれる歩みをささげることができるよう、と願うものです。そう願いつつもお罪だらけの私たちです。どうかそんな私からも、ご自身の計画前進のための良いものを取り出して下さい！そして御名のために役立つ歩みとしていただけるように！と祈りつつ、主に従う歩みへと進んでまいりたく思います。